

## 6 ステージ D2 前立腺癌の予後因子

斎藤 俊弘・原 昇・北村 康男  
小松原秀一

県立がんセンター新潟病院泌尿器科

【目的】ステージ D2 前立腺癌の治療成績およびその予後因子について検討する。

【対象と方法】1992年～2003年に当科で治療したステージ D2 前立腺癌新鮮例のうち組織学的に腺癌の診断が得られていた175例を対象とし、年齢、PS、Hb、Plt、ALP、LDH、治療前 PSA、T分類、N分類、EOD、分化度、(初期治療としての)MABや化学療法の有無などの予後規定因子について retrospective な検討を行った。

【結果・考察】全症例の5年生存率は34.8%、疾患特異的5年生存率は41.7%であった。単変量解析ではHb、Plt、ALP、LDH、治療年代、T分類、化学療法の有無で予後に有意な差を認めた。多変量解析では治療年代、PSA、化学療法の有無で予後に有意な差を認めた。

【結論】ステージ D2 前立腺癌の治療成績向上のための戦略の1つとして初期治療としての内分泌化学療法の有用性が示唆された。

## 7 ホルモン依存性前立腺癌細胞 LNCaP における副腎由来 androgen 代謝に対する考察

鈴木 一也・西山 勉・原 昇  
山名 一寿・Vladimir Bilim・糸井 俊之  
丸山 亮・高橋 公太

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
腎泌尿器病態学分野

【目的】ホルモン依存性前立腺癌細胞株 LNCaP を用いて前立腺癌内 androgen 代謝機構につき検討した。

【方法】LNCaP を各濃度 0.1-10nM の DHT, testosterone, androstendione, dehydroepiandrosterone (DHEA), 濃度 0.1nM-1 $\mu$ M の OH-flutamide を加えた medium で培養し、培養上清中の PSA を RIA 固相法にて測定、androgens の PSA 産出に対する効果をみた。また、それぞれの 10nM 添加液 (OH-flutamide は 1 $\mu$ M) に濃度 0.1-10 $\mu$ M の

finasteride を加え、PSA 産出抑制効果も合わせて測定した。

【結果】DHT, testosterone, androstendione, DHEA, OH-flutamide 添加により、それぞれ濃度依存的に PSA 産出が増加した。濃度 1 $\mu$ M の finasteride 添加によって、testosterone, androstendione, DHEA による PSA 産出が抑制されたのに対して、DHT, OH-flutamide では産出は抑制されなかった。

【結論】再燃癌モデルの LNCaP において副腎由来 androgens は直接癌細胞に作用するのではなく、細胞内で DHT に代謝された後、前立腺癌増殖に関与すると考えられた。去勢+anti-androgen のいわゆる Complete Androgen Blockade に、副腎由来 androgens の DHT への代謝抑制を加えることで再燃癌においても癌進展抑制効果を得られる可能性が示唆された。

## 8 転移性脳腫瘍に対する新型ガンマナイフ・モデル C の有用性について

佐藤 光弥・森井 研・秋山 克彦  
五十川瑞穂\*

北日本脳神経外科病院脳神経外科  
新潟大学脳研究所脳神経外科\*

転移性脳腫瘍に対するガンマナイフ治療は、医学的な禁忌がほとんどなく、開頭手術や全脳照射に比べて患者の負担が少なく、原発巣に対する治療に悪影響を及ぼすこともなく、QOL の点からも第1選択となることを第63回の本研究会で報告した。1997年10月から2005年3月22日まで1,800例のガンマナイフ治療を経験したが、そのうち転移性脳腫瘍は1,164例で64.7%を占める。2003年8月に新型ガンマナイフ・モデルCを導入してからの522例では、転移性脳腫瘍は389例(74.5%)であった。モデルCには、コンピュータ制御により自動で頭部の位置の変換が行えるオートマチック・ポジショニング・システム (APS) が搭載されており、治療時間の短縮だけでなく、副作用を軽減して治療効果も高める照射計画を立てることができるようになった。つまり腫瘍自体

には今まで以上に高線量が照射され、周囲の正常脳組織には、従来よりもさらに低線量となるような計画へと進歩した。

## 9 骨肉腫患者の MTX 大量療法中の尿中に carbonic anhydrase II (CA II) が検出された 1 例

島野 宏史・守田 哲郎・小林 宏人  
 瀬川 博之・内山 徹・佐藤 豊二\*  
 県立がんセンター新潟病院整形外科  
 同 研究検査部\*

MTX 大量療法中は尿の pH をアルカリ性に保ち、MTX の排泄を円滑にして副作用の防止に注意することが重要である。

この症例では、本療法中トランスアミナーゼの軽度な上昇はみられたが、腎機能のマーカーである BUN やクレアチニンの値は変化しなかった。本療法の腎への影響を検討するために、尿タンパクを SDS- (5-20% linear gradient) PAGE で分析した。Alb の他に分子量約 3 万の sharp なタンパク帯が検出された。このタンパクを MALDI-TOF MS 分析して、CA II が Rank 1 の候補タンパクであった。抗ヒト CA II 抗体を用いた western blotting で CA II であることが確認された。この症例では、血中の MTX 濃度が上昇に相応して CA II が検出された。さらに興味深いことは、血中 MTX 濃度が  $4 \times 10^{-8}$  M (4 日目) になっても CA II が検出された。CA II は腎では Henle loop に局在するので、subclinical な意味があるかもしれない。

## 10 放射線療法が無効で、化学療法により CR が得られた再発子宮頸癌の 1 例

笹川 基・富田 雅俊・本間 滋  
 児玉 省二  
 県立がんセンター新潟病院産婦人科

再発子宮頸癌の予後は不良であり、当科の治療成績でも、再発後の 5 年生存率は 22.3% である。再発部位が 1ヶ所、あるいは病巣摘出が可能な症例では比較的予後良好だが、他の症例、とりわけ

放射線療法が無効な症例の治療はきわめて困難である。今回、再発治療として放射線療法が無効で、その後の化学療法により CR が得られた症例を経験したので報告する。

患者は 63 歳、子宮頸癌 I b2 期 (腺扁平上皮癌) の診断で広汎性子宮全摘出術を行った。補助化学療法として CP 療法を 3 回施行した。6 ヶ月後、傍大動脈リンパ節に再発したため外照射を行い、病巣は消失した。さらに 4 年 3 ヶ月後、骨盤内リンパ節に再発し、外照射を開始したが増悪したため中止した。シスプラチンと塩酸イリノテカンを用いた化学療法を 4 回施行し、CR が得られた。現在まで同レジメンを用いた周期的化学療法を行い、2 年 3 ヶ月経過し無病生存している。

## 11 放射線治療後 90 歳を超えたがん患者の臨床評価

末山 博男・山ノ井忠良・山名 展子  
 県立中央病院放射線科治療部

我々は放治後に 90 歳になった癌患者を 9 例経験したので、放治方法とその結果、現時点での臨床像を検討し、超高齢者癌患者の放射線治療のあり方を考察する。1994 ~ 2000 年まで当科に登録された 1297 人中、80 歳以上の悪性腫瘍の患者数は 123 人 (9.5%) であった。男性 84 名、女性 39 名で、平均年齢は 83 歳だった。90 歳以上生存した症例は、病期は I 期が多く、治療前の PS が比較的良好で、照射後の一次効果が全例 CR だった。

放射線治療後晩発障害を惹起したのは再発を 2 回起こした舌癌症例のみで、放射線治療は、照射後に 90 歳代になっても QOL に悪影響を及ぼしていない。

超高齢患者に対しての根治照射は、生存期間のみならず QOL の観点からも症例を選択して、積極的に行う価値があると思われる。